

人工衛星「まいど1号」は、東大阪発という話題性から数多くのメディアで紹介された



「まいど」の次は「人型ロボット」 東大阪組合がぶち上げた新計画

「月面で人型ロボットに日の丸を描かせる」

東大阪を中心とした中小企業からなる東大阪宇宙開発協同組合（SOHLA）は4月末、「人型宇宙ロボットプロジェクト」をぶち上げた。

SOHLAの秋本日出夫理事長は「ロボットは日本のお家芸であり、これからの有望な産業だ。にもかかわらず、宇宙で使われているロボットアームはカナダ製。われわれがロボット技術を世界にアピールできれば、日本経済は元気

になる」と、計画の目的を語る。

SOHLAは昨年1月、小型の人工衛星「まいど1号」を打ち上げ、軌道投入に成功した。数多くのメディアに登場したこともあり、「国民の半分以上が『まいど1号』を知ってくれた。おかげで東大阪の中小企業に対する信頼度や知名度がアップした。今度は全国の中小企業の力を結集して、さらに難易度の高い計画を実現したい」と秋本理事長と熱弁を振る。宇宙に送り込むのは、人よりも少し小さいサイズの二足歩行型ロボット。月面の砂上を歩かせるのはじつに困難なチャレンジだが、「二足がダメだったら、這ってでもいい。人間だって赤ん坊はハイハイから始まるでしょ」と、あくまで人型であることにこだわる。かつて1969年7月にアポロ11号が月面着陸に成功し、アームストロング船長とオルドリン飛行士が人類史上で初めて月に降り立った。それから約40年間、月の砂を踏んだ者は誰一人としていない。その夢とロマンを託すには、確かに人型ロボットのほうが似つかわ

しい。

計画実現の目標時期は2020年。ま

ずは今夏中に技術的

なテーマを洗い出し、

その後、全国の中小

企業へ協力を呼びか

けていく。協力企業

は最大で50社程度を

見込んでいる。

最 大の課題は資金の調達である。開発費用は10億

円を予定しており、

その多くを国からの

補助金などで賄いたい

と考えた。

ちなみに人工衛星の

打ち上げ計画では、

新エネルギー・産業

技術総合開発機構

（NEDO）から総

額7億円の助成金を受

けた。

しかし、「まいど1号」

の開発は約1億5000万円

で行ったものの、

続く2号機は5億5000

万円を投じながらも

打ち上げには至らず、

計画は中断となっ

た。

さらに「まいど1号」

も、打ち上げ後の毎月の

運用費負担の大き

さや、電波法上の



月面に降り立ったロボットに日の丸を描かせるという突飛な計画。ソリは大阪的だが熱意は本物のようだ

え、一般の人びとに宇宙を身近にしたことなど、その功績は否定できないだろう。

「子どもの頃、月ではウサギが餅をついていると信じていた。ウサギならぬロボットには、月から見た地球の映像を送ってもらいたい。そして、ロボットは置き去りにせず、無事帰還してもらおう。そのついでに、月の石を持ち帰ってもらったら言うことがない」と秋本理事長

東大阪発の、まさに「夢のロボット計画」が、目論見どおり全国へと広がれば、再びメディアの注目を集めるだけでなく、日本の宇宙産業の底上げにつながることを望む。